

ル・ランシー、ノートル＝ダム教会ステンドグラスに関する考察
—ステンドグラス職人マルグリット・ユレの役割を中心に—

お茶の水女子大学 味岡 京子

パリ中心部から北東約13キロに位置するル・ランシー市に建つオーギュスト・ペレ設計ノートル＝ダム教会(1923年竣工)は、鉄筋コンクリート造による近代教会建築の先駆けとして建築史上名高い教会である。その建築的特徴や建築史的な位置づけに関する考察は既に数多くなされてきた。しかしながら、画家モーリス・ドニが下絵を手がけたとされるステンドグラスに関しては、造形的にも主題的にも十分に検討されてきたとは言い難い。

盛期ゴシック教会にも匹敵する光の壁が、画期的にモダンなデザインによるステンドグラスにおいて実現されたその特異性ゆえ、この教会は当時「鉄筋コンクリートのサント＝シャペル」とも呼ばれた。そのステンドグラスを実際に制作したのは、マルグリット・ユレ(1896-1967)という、宗教的ステンドグラスに非具象を最初に導入した人物として後年位置づけられることとなる女性である。本発表では、これまであまり注目されてこなかった彼女の役割に目を向け、彼女自身が専門誌に寄せた記事やドニとの書簡をもとに制作経緯を辿ることによって、作品の独自性を明確にすると同時に、それがいかに社会的・経済的要求と深く結びついていたかを提示する。続いて、造形的特質が主題に及ぼした影響に言及しながら、そのモダニズム的達成が、異なる文脈においてどう機能したかを検証しつつ、当時の教会装飾が内包する意味を考えていく。

ル・ランシー教会のステンドグラスは、伝統的な手法によってではなく、10cm四方の規格化されたガラスの分断によって実現されたものであった。それは、時間と経費の節約という、当時の装飾家に課せられた厳しい条件に対してユレが導き出した解答であったが、その結果生み出される「格子(グリッド)」の効果を敢えて強調し、そこにこそ近代的価値があるのだと彼女は主張した。一方、この時期パリ近郊の労働者の町に次々と建立された教会の装飾に目を向けると、時勢を反映した主題が少なからず見てとれる。その中には政治的なメッセージを公然と伝えるものもある。その傾向は、当時復活の兆しを見せた壁画装飾においてより顕著であるが、ル・ランシーにおいても、第一次世界大戦マルヌ川の戦いに取材した記念碑的テーマ「マルヌの勝利」が重要な場所を占めている。しかしここでは、周囲の幾何学的装飾と「格子」の効果が、その逸話的要素を減ずる結果となっている。竣工当時大きな反響を呼んだにもかかわらず、大戦間という、政治と教会が微妙に接近したこの時期、フランスにおける続く大規模な教会装飾において、こうした主題性の希薄な装飾は、しばらくの間実現することはなかった。

本発表は、このように、モダニズムを先取りする造形と今日では見なされながら、同時代においては例外的な試みで終わったともいえるル・ランシーの「装飾」の意義を、当時の文脈において再構成し、多面的解釈を試みようとするものである。